

「慣れるまで習え」を徹底した授業で 「一生使える英語力」を身につける

本物の英語力が身につく塾として評価が高い平岡塾。男女御三家をはじめとして、名門校の生徒が数多く通い、東大合格率80%と、圧倒的な合格実績をあげている。そのパワーの源泉となっているのはどのような教育なのか。大町慎浩代表に話を伺った。



現代版寺子屋スタイルの教室。アットホームな雰囲気にはまっている

現代の寺子屋ともいえるべき ユニークな授業スタイル

平岡塾を訪れて、まず驚かされるのが、一風変わった授業スタイルだ。3階建ての小さなビルに5つの教室があり、絨毯の上にイタリヤ製の頑丈なローテーブル（座卓）が並んでいる。まさに「現代の寺子屋」といった雰囲気なのである。

ただし、寺子屋といっても、「畳みに正座」のような堅苦しいものではない。生徒たちは自由な姿勢でローテーブルに向かい、空腹になれば授業中に軽食をとりつつ、周囲の友人と歓談している。人に迷惑をかけない限り、何をやってもOKというおらかさが感じられる。

る。「ヨーロッパの知識人が集うサロン」と形容した卒業生もいるそうだ。

不正解に至った思考の プロセスを全員で検証

平岡塾の学びのベースになっているのが、大量に課される宿題である。毎回の授業で、読解、文法、英文文それぞれB4版1〜2枚の宿題プリントが配布される。

「語学の修得に近道はありません。『習うより慣れる』ではなく、『慣れるまで習え』という姿勢で、たくさん英文に触れて、自分の力で問題を解くこと。そのオーソドックスな積み重ねでしか、本物の英語力は身につかないと考えています」(大町代表)



平岡塾著の「日本の「ダメ英語」を叩きなおす」。真剣に英語を学びたい人のためのバイブルだ

授業は午後5時から、休憩をはさみながら3時間〜4時間半におよぶ長丁場。一方的な講義形式ではなく、講師たちは積極的にローテーブルに座る生徒たちの輪の中に入っていく、活発な質疑応答が展開されていく。

せをします。その際、単に正解を教えて終わりではありません。間違えた生徒がいた場合、なぜそう考えてしまったのか、思考のプロセスを教師と生徒全員で検証します。時間も手間もかかる方法ですが、それによって考え方のものを修正することができるとです」(大町代表)

使用教材は「古典的名著」という方針を貫き続ける

使用する教材は、イギリスのパブリックスクールの生徒が読んでいる古典的名著が中心で、良質の英語を暗誦・精読・多読していく。例えば、中1〜2で『ドン・キホーテ』『八十日間世界一周』を読破した後、中3からはモーム、ラッセル、オーウェルなどの作品を取り上げている。いずれも音調・修辭・内容の点で定評のある作家たちだ。



平岡塾代表
大町 慎浩氏

明快ながらも力強く格調高い英文は、優れた読解用教材であると同時に、そのまま英作文の手本にもなる。

「教材が古いと思われるかもしれませんが、平岡塾では、柱となる教材を安易に変えることはありませぬ。英語がどれほど多様化しようとも、英語を外国語として学ぶ私たちが手本とすべき正統的な英語の型は簡単には変わるものではないからです。古典的名著の名文こそが最適の教材という方針を貫いています」(大町代表)

ネイティブ講師の授業や エッセイライティングの指導も

毎回の授業のうち40分間は、ネイティブ講師によるリスニングなスピーキングの指導も組み込まれている。教え方もユニークで、ジャズ音楽のリズムにあわせて、英語



生徒と先生の距離が近く、講師室には生徒たちが気軽に質問に訪れている

特有のリズムを体得するなど、さまざまな工夫が凝らされており、生徒たちにも好評だ。

また、高校生になると、エッセイライティングの添削指導も行われるほか、長期休暇中には、メールで添削指導する「eライティング」も導入されている。近年、難関大学の入試でエッセイライティングの出題が増加しており、平岡塾の生徒にとっては大きな強みになっている。

卒業生の多くが 国際的な舞台で活躍

このように、平岡塾の英語教育は、古典的名著を大量に読みこなしたり、エッセイライティングのトレーニングを積んだりなど、一般的な受験英語の枠を超えたハイレベルな内容になっている。それが結果として、難関大学の高い合



平岡塾で使用している教材。ラッセル、オーウェルなど、古典的名著の名文が中心だ

格実績につながっている。

「しかし、大学受験はあくまで通過点に過ぎません。私たちが養成したいのは、一生使える英語。それも日常会話がこなせるレベルではなく、海外の研究者やビジネスマンと対等に渡り合える英語力を養いたいです。そのため、折り目正しい英語」を身につける必要があるわけです」(大町代表)

実際、平岡塾の卒業生は、高校卒業時点でTOEIC970点以上をマークして、コロンビア大学、ハーバード大学など、アメリカの名門校に進学するケースも少なくないという。社会人になってからも、世界的学術誌『ネイチャー』に論文が掲載された東京医科歯科大学の高柳広教授や、海外の涉外弁護士、オックスフォードやケンブリッジの教授など、世界の第一線で活躍している。



ネイティブ講師の授業。ジャズのリズムにあわせて、英語のリズムパターンを覚えるなど、工夫が凝らされている